

仮定された結果を説明することが遂行行動に及ぼす効果(2)

Effects of Hypothetical Explanation on Task Performance

大 坪 靖 直

(Yasunao Ohtsubo)

This study was designed the effects of explaining hypothetical outcomes for oneself on actual behavior. Two hundred five female students were randomly assigned 5 (2 explain, 2 image and control) \times 2 (measurement of motivation) conditions.

Results didn't suggest that the effects of explaining hypothetical outcome was strong. Type of reasons which were using on explaining was discussed.

これから行う課題について成功あるいは失敗を仮定し、仮定した結果の因果的な説明を求めると、現実の課題成績が説明を求めた仮定された結果と対応することが報告されている (Sherman et al., 1981; Campbell & Fairey, 1985)。この現象の生起過程、および、実験操作を図式化したものが Fig. 1 である。この図から示唆されるように、従来の研究で検証されている説明の効果には、仮定された結果を単にイメージすることによる効果が混入していると考えられる。本研究では、仮定された結果をイメージすることが課題成績に及ぼす

効果と、仮定された結果を説明することが及ぼす効果 (イメージ効果を含む) を各々検討する。

従来の原因帰属に関する研究では、出来事が生じた後に行われる原因についての推論過程を研究対象としていた。本研究では、まだ現実には生起していない、将来における仮定された出来事に対する原因の推論過程を扱う。この点が、本研究の特徴の1つである。

本研究では、実験操作の都合上、被験者に仮定された結果の説明を求めるが、日常場面においても、将来の出来事の結果を自分自身で仮定し、その原因について自発的に説明することも十分ありえるという立場をとる。そういう意味で、将来の出来事を説明することは、遂行行動に影響を及ぼす自己生成的な原因と考えられよう。この点が、本研究のもう1つの特徴である。

方 法

実験計画 5 (説明・イメージ要因; 成功説明, 成功イメージ, 失敗説明, 失敗イメージ, 統制) \times 2 (遂行動機測定; あり, なし) の被験者間 2 要因計画であり、遂行動機測定要因は、自己期待と遂行行動の媒介過程を検討するために設定した。被験者 大学生女子 205 人を、10 条件に無作為に割り当てた。

課題 16 問からなるアナグラム課題 (4~7 文字の並べ替え課題) を用いた。

手続き 概要は Fig. 2 のとおりであり、実験は 2~6 名の小グループで実施した。パーソナリ

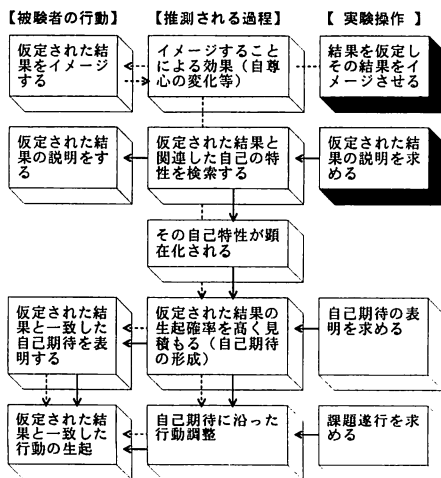


Fig. 1 仮定された結果を説明することと、仮定された結果をイメージすることが課題遂行に影響を及ぼす過程

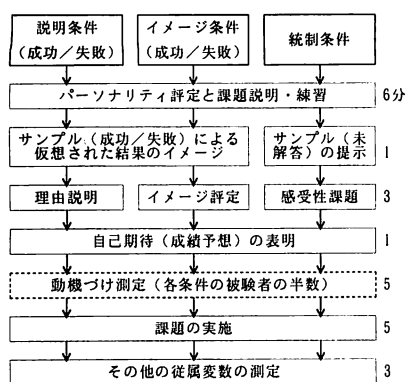


Fig. 2 実験の流れ

ティ評価 (自分は論理的な方である等, 10項目) は, 自己の内的な特性に対する注意を喚起するために行った。説明およびイメージ条件におけるイメージ操作は, 成功あるいは失敗を示す典型的なサンプル (採点済みの模擬答案) の提案と, 教示 (自分がそのような成績をとった場面をできるだけリアルにイメージして下さい) によって行った。

理由説明は, 仮定された結果の原因を箇条書きで思いつくだけ記述させた。また, イメージ評価 (15項目からなるSD法; 明るい—暗い等) と感受性課題 (4コマ漫画にタイトルをつける) は, 各条件間の実験の流れを時間に統制するために行った。自己期待は, これから実際に行う課題について, 100点満点 (平均50点) で自分の成績予想を記述させた。

動機づけの測定は, 各条件の半数の被験者を対象に次の手続きにより行った。隣室でモニターしていた実験協力者が, 自己期待の表明直後に入室し, 「心理学実験に関する調査」という名目で, 心理学実験にどのくらい真剣に取り組むかという項目 (7段階評価) に回答させた。その間, 実験者は退室していた。

その後, 実験者が再入室し, 課題を実施した。最後に, 現実の課題結果に対する自己評価と, 能力や運が課題結果に及ぼした影響の認知, いわゆる原因帰属を回答させた。(本報告では割愛する)。

結 果

自己期待 条件間の自己期待 (成績予想) の違いを検討するために 5×2 の分散分析を行ったところ, 説明・イメージ要因の主効果が有意であった

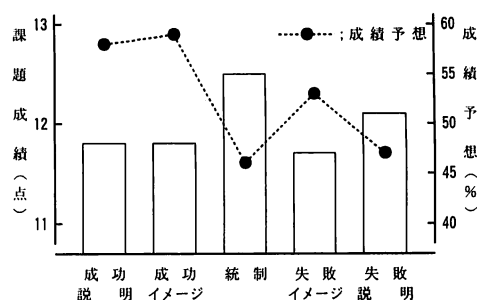


Fig. 3 各条件における成績予想と課題成績の平均値

($F_{(4,195)}=9.58, P \leq .05$)。平均値の様相は, Fig. 3 に示した。多重比較の結果, 失敗説明と統制条件に比較して成功説明と成功イメージ条件の自己期待が高いことが示された。

課題成績 自己期待と同様の分析を行ったところ, いずれの効果も有意でなかった。平均値の様相は, Fig. 3 に示した。なお, 自己期待と課題成績の関連性を検討するために, 全ての被験者をサンプルとしたピアソンの相関係数を算出したところ, $r=0.01$ ($df=203$, N.S.) であった。

課題に対する動機づけ 説明・イメージ要因における各条件間の課題についての動機づけの違いを検討するために, 1 要因分散分析を行ったところ, 主効果は有意でなかった ($F_{(4,97)}=1.86$, N.S.)。なお, 各条件の動機づけの平均値 (理論的に可能な得点範囲は 1~7) は 5.6~6.4 であり, 天井効果の生起が推測された。

また, 自己期待と課題成績の媒介過程を検討するために, 動機測定あり条件の被験者をサンプルとして, これら 2 つの変数各々と動機づけとの相関係数を算出したところ, $r=0.09, 0.05$ (ともに $df=99$, N.S.) であった。

仮定された結果の説明理由分析 仮定された結果を説明するために用いられていた理由の種類を分析するために, まず, 2 人の評価者が各々独立に各理由のコード化を行った。コード化の一致率は 83.4% であり, 分類が不一致なものについては協議してコードを決定した。仮定されていた結果ごとに, 各タイプの理由を用いていた被験者の数を Table 1 に示した。

その結果, 一人につき平均 3.2 個の理由が記述されていたが, 実験者が意図していた内的で安定した理由よりも内的で不安定な, および, 外的な理由を用いる傾向にあったことが示唆された。

Table 1 説明に用いられていた原因の種類と
各原因を用いた被験者数 (%)

原因の種類	具体的な原因	成功説明	失敗説明
内的／安定	能力・性格	16(39.0)	17(38.6)
	経験	3(7.3)	4(9.1)
内的／不安定	心身の状態	19(46.3)	35(79.5)
	課題方略	8(19.5)	7(15.9)
外的	課題特性・運	20(48.8)	7(15.9)
その他・不明		20(48.8)	21(47.7)
被験者数		41(100.0)	44(100.0)

考 察

仮定された結果を説明することが行動に及ぼす効果（説明効果）、および、イメージ効果はともに検証されなかった。また、自己期待と課題成績の関連性もみられなかった。ただし、説明およびイメージ効果を媒介すると考えられている自己期待については、成功を仮定した場合のみではある

が、仮説を支持する結果が得られた。これらのことから、課題についての自己期待が成績に及ぼす効果（自己期待効果）は、非常に小さかったことが推測されよう。自己期待効果の媒介変数として測定した課題に対する動機づけは、天井効果を起こしてはいたが、自己期待および課題成績と非常に低い関連性を示しており、このこともまた自己期待効果の弱さを推測させる。

自己期待効果を弱めた原因の1つに、説明に用いられた理由のタイプが考えられる。本研究の被験者は、心身の状態や課題特性など不安定あるいは外的な理由をあげた者が多かった。これらの理由の特性が、自己期待の安定性を低くした可能性が考えられよう。

大坪（1992, 1994）の先行研究においても、仮定された結果を説明することの効果は、それぞれ部分的にしか検証されていない。これは、仮定された結果を説明することに基づく自己生成的な効果は、比較的弱いことを示唆するものである。

引 用 文 献

- Campbell, J. D. & Fairey, P. J. 1985 Effects of self-esteem, Hypothetical explanations, and verbalization of expectancies on future performance. *JPS* (48), 1097-1111.
- 大坪靖直 1992 仮想結果の説明が課題遂行に及ぼす効果 福岡教育大学紀要, 41 (4), 279-282.
- 大坪靖直 1994 仮定された結果を説明することが遂行行動に及ぼす効果 福岡教育大学紀要, 43 (4), 277-279.
- Sherman, S. J., Skov, R. B., Hervitz, E. F., & Stock, C. B. 1981 The effects of explaining hypothetical future events: from possibility to probability to actuality and beyond. *JESP* (17), 142-158.